



サグラダ ファミリア Sagrada Familia (抜粋版)

カトリック水戸教会会報 2019年8月号

8月

水戸主任司祭 ウィリアム・ドネガン神父

私の人生において8月は別れの月です。私は18歳になる前の8月のはじめに、家族と別れて修道院に入りました。その翌年、アイルランドから船に乗って神学生としての修練のためにアメリカに渡りました。8月のことでした。そして6年の後、私は自分の国に帰り、司祭として叙階されました。私は従順の誓いに従って日本に行く決意をしたことを両親に伝え、再び8月に家族に別れを告げて東洋に旅立ちました。考えてみると、私の生まれたのも8月です。

修道院に入る前には、毎年母方の祖父母と夏を過ごし、大きな影響を受けました。祖父母は孫の誰かが聖職者になることを特に祈りました。そしてこの祈りは私が司祭となり、宣教師として派遣されることで応えられました。祖父母は聖母マリアへの深い信心を持っていましたので、聖母被昇天祭である8月15日には教会までロザリオを唱えながら片道5kmの道を歩いて一緒にミサに預かりました。私が司祭になったのは、私の家族の聖母マリアへの深い信心のためであるといっても間違いのないと思います。

数年前の春、那須のトラピスト修道院を訪ねましたが、シスターたちの毎日の祈りと労働のライフスタイルに大きな感銘を覚えました。シスターたちは朝の3時45分に起きて、4時5分から1時間以上にわたって朝の祈りを唱えます。私は朝の6時30分からのミサと一緒に捧げましたが、全ての典礼と賛歌に落ち着きと新鮮さを感じました。

シスターたちは彼女たちの祈りの観想生活よりも彼女たちが作っているがレットによってよく知られています。シスターたちが全ての教会、そして特にさいたま教区のための祈りの観想生活の中に常に新鮮さを感じる事が出来ますように私たちは彼女たちのために祈らなければなりません。

8月15日は水戸教会で午後7時から聖母被昇天祭を国際ミサによってお祝いし、その後でみんなロザリオを唱えながら行列をしてからパーティーをする予定です。

Me llamo Jorge—私はホルヘです。よろしく申し上げます。

さいたま教区の水戸教会の皆様にあたたかい心で受け入れて頂いてありがとうございます。

2014年頃水戸教会で聖香油のミサのために水戸教会へ初めて来ました。さいたま教区の助祭ホルヘ・マヌエル・マシアス・ラミレスと申します。メキシコ合衆国のハリスコ州のグアダラハラ中心です。出身教会は聖十字架教会です。

グアダラハラはメキシコの第二番目大都市ですが田舎の雰囲気です。伝統的な大都市、日本と比べたら京都だと思います。このような町で生まれ育ちました。

8人兄弟の中で私だけ司祭の道を選びました。8歳の時に自分の主任司祭のような神父になりたいと思っていました。一人で五つの教会を持って、ボロボロのクライスラーの茶色の車に乗ってミサのために五つの教会を回っていました。しかし中学校を終わってから神学院に入りました。私は神学生としてキャリアが長いでも今まで楽しいことたくさんありました。

興味は祈りと勉強そして魚を育てています。日本へ来てから盆栽に興味を持つことになりました。今は松、紅葉、杉の盆栽を育てています。時々抹茶を点てます。

小神学院はグアダラハラで勉強しました、そして大神学で哲学の四年間と神学科一年までメキシコ市で養成を受けました。2009年12月5日に7時に成田空港に着きましたが芸者、忍者、侍がいなかったからがっかりしました。2010年1月に日本語の勉強を始めました。

さいたま教区の所沢教会の信者の家でまる一年間ホームステイをしました。日本語学校で2年間日本語を勉強しました。そして群馬県の前橋教会に半年と伊勢崎教会にも半年を住んでいました、この時に信者さんとシスター二人日本語を教えて頂きました。まだ日本語が足りないので遠慮なくいつでも日本語を教えて下さい。宜しくお願い致します。

平和旬間の集い 8月12日（月）13:30～水戸教会において開催

「平和旬間」は、教皇ヨハネ・パウロ2世が訪日された1981年に、広島市の平和記念公園で全世界に向けて、なされた平和アピールに呼応して設けられたものです。「戦争は人間の仕業です」という言葉で始まる「平和アピール」は、当時の世界に衝撃を与えました。具体的には、広島に原爆が投下された8月6日から長崎への原爆投下の日をはさみ、15日までの10日間を指します。平和の

ために祈り、日夜努力を払っておられる教皇と心を合わせ、また日本司教団の意向に合わせて、平和への道を共に歩いて行くこととしたものです

コンチータ列福式の巡礼

尊者マリア・デ・ラ・コンセプション・カブレラ(コンチータ)の列福式ミサに参加しました。5月4日メキシコシティのグアダルupesの大聖堂にて、2万人を超える世界各国からの参列者で行われました。コンチータは、1862年12月8日、メキシコのサン・ルイス・ポトシで熱心なカトリック信者の家庭に生まれ、22歳で結婚して9人の子どもを育てました。

コンチータの生涯と著作によって、神は教会に使徒職の十字架で象徴される十字架の霊性をお与えになりました。この霊性は聖性の道です。私たちの個人的な召命に従って、そしてまた私たちが出会う具体的な状況においてこの霊性を生きるよう導いてくださいます。

「十字架の家族」と言われる20余りの修道会、十字架の使徒職、司祭キリストの友愛会、聖霊宣教会そして三位一体聖体宣教女会等の先導者となりました。

私たちは、プエブラ、メキシコシティ、サン・ルイス・ポトシの3都市を訪れました。プエブラでは、三位一体聖体宣教女会のエデンの園のような修道院、黄金に輝くロサリオ礼拝堂、テオティワカン遺跡のピラミッド、コンチータゆかりの地サン・ルイス・ポトシです。5日間で20余りのカテドラル、大聖堂、簡素な聖堂めぐりをしました、なかには支倉常長の御絵、長崎の26聖人の御絵が飾られており、そしてスペインの植民地時代やそれぞれの時代の建築様式の聖堂、さらにドミニコ会、イエズス会等の各修道会特徴の聖堂、そして黄金に輝くロサリオの教会堂、メキシコ2,000年の歴史が詰まった聖堂にただただ圧倒されました。

水戸教会の皆様にご提供いただいた千羽鶴は、コンチータが眠る教会の地下の墓石に奉納させていただきました。その教会の聖堂正面は巨大なステンドグラスの壁になっていましたが、偶然にもそこに巨大な鶴が描かれていました。

列福式の旅は、Sr グアダルペ、Sr 今田、そして「十字架の使徒職」会員の方と総勢12名でしたが、特に前総長のSr グアダルペに案内していただき、詳細な説明とお世話いただきました事を深く感謝いたします。列福式には「十字架の使徒職」会員の方が日本語で共同祈願をなされ、一体感を感じました。

－ 十字架の家族のために －

十字架の家族のすべての会員が、神と人々との唯一の仲介者であるキリストと一致して、兄弟的交わり、あわれみ、連帯が行きわたる世界を築くものとなりますように。



チームビルディングー外国語ミサ奉仕者の集い

『仲間が思いを一つにして、一つのゴールに向かって進んでゆける組織づくり』。これがチームビルディングの目的です。7月27、28日の2日間、友部修道院の施設をお借りして、外国語ミサ奉仕者による集い「チームビルディング」を行いました。サポートメンバーも含め約25名が集まり、教会での活動について話し合い、勉強を行いました。

1日目、まず夕食を神父様方とともにし、お腹も気持ちも満たされたなかで、4つのグループに分かれての話し合い、提案発表を行いました。「典礼」「教育」「日々の奉仕」「イベントやプログラム」のテーマ毎に議論し、それぞれの意見をまとめました。この内容を整理し、教会委員会への提案へとつなげる予定です。その後、お御堂にて、テゼの祈りを行い、一日目は深い祈りの中で終了しました。2日目は、ロザリオの祈りから始まりました。ブラザー中澤が亡くなって二年の追悼ミサに与ったのち、ビファー神父様、ルスニー神父様にご講話をいただきました。ルスニー神父様からは、フィリピンにキリスト教が伝来して500年になる2021年まで特別な祝福が行われていること、2019年は「若者の年」として、若者たちに向けての活動が行われているお話を伺い、日本で働く若者たちがここに集まってくれたこと、そして水戸教会で奉仕していただいていることに深い感謝を抱きました。その後は、歌やゲームなどを行い、仲間が思いを一つにする瞬間を分かちあい、2日間の集いを終了しました。今後の教会での活動に貢献するものと強く感じる2日間でした。

「信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住ませ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかり立つ者としてくださるように。」エフェ 3:17



JCCS日本カトリックスカウト協議会 Japan Catholic Conference of Scouting

ボーイスカウト 水戸第5団

千波湖の清掃

水戸黄門まつり花火大会が、7月20日(土)に開催され、次の日の朝4時からスカウトたちは眠い目をてパチパチして、千波湖の南側一帯の花火の燃えカスや見物客の捨てたごみ拾いを、2時間にわたって行った。

キャンポリー

8月8日(木)~12日(月)にかけて地区キャンポリーが、内原のアスパイアにて予定されています。ビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャー、指導者の65人が参加します。キャンポリーのプログラムで10日(土)には宗教儀礼、ホルヘ助祭による集会祭儀が行われます。

ボーイスカウト×ユニクロ 難民支援衣料回収プロジェクト

今世界は、かつてないほど大勢の難民であふれています。安全な新しい場を求めて、故郷を捨てざるを得ない人々が何千万人もいるのです。

皆さまの1着には、世界を変える力があります。ボーイスカウトでは今年も9月に世界中難民の方々に届ける活動を実施します。どうか、ご協力をお願いします。

日本キリスト教海外医療協力会岩本直美ワーカー報告会のお知らせ

麹町聖イグナチオ教会会員、日本キリスト教海外医療協力会バングラデシュ派遣ワーカー岩本直美さんの活動報告会を下記の通り行います。

タイトル：「弱さがつぐむいのちの物語」

日時：10月27日（日）11:00～12:00

場所：信徒会館

岩本直美さんはバングラデシュのマイメンシンという小さな町で、ラルシュ・マイメンシンを立ち上げ、長いあいだ障がい者と共に歩いてこられました。ラルシュはカナダ人のカトリック信徒ジャン・バニエという方が障がいを持った方々と共に歩むために設立された団体で、日本でも静岡県に「かなの家」というラルシュのホームがあります。岩本さんはこのたび日本に帰国され、9月～11月に日本全国の教会や学校を回り、活動報告会を開催されます。このたび水戸教会においても報告会を開催させて頂くことになりました。岩本さんのお話は我々カトリック信徒の信仰を深めるためにとっても有意義と思います。皆さま是非お気軽にご参加下さい。